
隣りの王子様

阿澄 利緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣りの王子様

【Zコード】

Z8686U

【作者名】

阿澄 利緒

【あらすじ】

ある日の夜、自分のベッドに勢いよく倒れ込んだはずが、何故か見覚えのない部屋の巨大なベッドにいた奥宮千秋。自分の部屋じゃない……？ 実はそこは「王子様」の寝室で、ベッドで寝ていたそのご本人の体の上に倒れ込んでいて、そしてなんと、その王子様の「夜のお相手」をすることになり！？

コメディ時々シリーズ、王子様とケンカするほど仲が良い？そんな彼女の物語。

01・始まりの夜（前書き）

文章力が皆無ですが、どうぞよろしくお願いします。
一緒に楽しんでもらえると嬉しいです。

「おねーちゃんおねーちゃん。みんなワイワイやつてたのしそうだよ！だからおねーちゃんもおいでのー！」

自室のベランダで夜空を眺めていたところを、可愛くて仕方がない小さな末の妹に服の裾を引っ張られてそう言われたら、そりゃあもうひとまリもない。何でしようかこの可愛らしい生き物は。思わずにはへ～としてしまう。

妹の言う通り、1階のリビングからは家族の笑い声が聞こえてくる。テレビを見ているのか、何かの話題で盛り上がっているのか、笑い声だけではよくわからない。でも本当に楽しそうだ。

だが残念ながら、今は夜空を眺めていたい気分だ。これといって特に深い理由があるわけではないのだけれど。

「美雪一。ケーキあるけど食べるかー？」

階段の下の方からすぐ上の兄の声が聞こえてきた。

兄3人、妹1人の5人兄妹の中で、このすぐ上の兄である三男とは昔から気が合わない。別に嫌いではないのだが、とにかくよくケンカする。年が離れているせいだろうか。

「けーきだつて！ おねーちゃんもいつしょにたべよつー！」

「何言つてんの。あのパソコン兄が呼んだのはあんたでしょー？」

私の「じょこ」から、早く下に行つておこで

妹は「はあーー」と素直に頷くと、部屋から出て行つた。本当に可愛い妹である。

その後も10分くらいぼんやりと夜空を眺め、それから部屋の中へ入る。部屋の明かりは消しているため暗いが、それでも窓から差し込んでくる月の光で足元が見えるほどは明るい。そのままベッドの方へ向かう。

相変わらずリビングからは楽しそうな笑い声。

別に眠いわけではないのだけれど。

おくみや ちあき
奥宮千秋は勢いよくベッドに倒れ込んだ。

それが全ての始まりだと「じょこ」とも知らずに。

* * *

窓から差し込んでくる月の光に照らされながら、執務机で青年はうとうとしながら接待客の話に耳を傾けていた。話の内容は国経済状況について。接待をするのも仕事の内に入るため、話を聞くくらい「どうしたことではない」。だが今回ばかりは早く終わらせたいのであった。仕事を面倒だと思ったことはあまりないのだが。

(早く寝たい……)

もううん、そのことを口に出すわけにもいかない。

話を終え接待客が部屋から出て行くと、青年は渡された書類にひと通り田を通じてから部屋を出た。向かう先は寝室。メイドや兵士とすれ違う度に恭しく礼をされるが、青年はそれに一切田もくれず歩いていく。

寝室に着き、扉を開けて中へ入る。部屋の中は相変わらず暗く静かだ。本来ならクローゼットから寝巻きを取り出して着替えるのだが、そのまま上着を脱いで部屋の中央にある巨大なベッドへと向かう。

眠気に誘われるまま、ベッドの上で仰向けになつて田を瞑る……。

すると。

ドスン！ と体の上に何かが落ちてきた。

割と重く、衝撃も大きかつたため思わず呻いてしまう。眠りうとしていたといふのに、一体何だろう。枕元にあるランプに手を伸ば

して明かりをつけ、体の上を見渡みると。

漆黒の髪の娘が、自分の体に覆いかぶさるよつこじて倒れていた。

「…………」

思考が完全に停止する。これはどうしたことだらう、この娘は誰なのだろうと考へる余裕もなく。あまりにも突然のことだ、言葉すらも失つてしまつ。

娘は何事か恥ぐと、ゆくゆくと顔を上げる。

そして。

その髪の色と同じ漆黒の瞳とかみ合つ。

青年はやつとのじと、悲鳴に近い叫び声を上げた。

「自分の幸せな時はどんなときか?」って訊かれたら、私は「寝ている時」と答える。この18年の人生の中で、それ以外に幸せだと感じたことはない……つて以前お兄ちゃんたちに言つたら「夢も希望もない寂しいヤツだな」と憐れみの表情で言われた。そう言つあんたらはどうなんですか?」のパソコンども。……おおつと、話がズレた。

とにかくにも、一番幸せなのは寝ている時。何も考えなくともいいからであつて。それに、あのベッドのふかふか具合が絶妙なのも理由のひとつ。あまりにもふかふかしすぎて、ベッドに横になつてものの5秒で眠れるくらいだ。小さい頃、このベッドを巡つて三番目の中と争つたこともある。まあ大格闘の末、なんとかこつちが勝つたわけだけだ。

それで、そのふかふかなベッドには眠るとき以外にも横になることもある。携帯をいじるときとか、雑誌や小説を読むときとか。そういう場合は大抵、ベッドへ勢いよく倒れ込む。……いや、ダイブするって言つたほうが正しいか。そりやもうボーフンと思いつき。だって、そのほうが体が弾んで楽しいから。

今回だつてそう。

別に眠いわけではないのだけれど、なんとなくベッドに横になりたかった。そしていつものように、体が弾むあの感覚を期待しながら

り、皿をつむって勢いよく倒れ込む。

「ぐえい」

…………ん?

あれ何だろい、このいかにも押しつぶされたときに出すよつな声は。明らかに私の声じゃない。ベッドへダイブして「ぐえい」なんて声を上げるはずがない。

しかも、なんでか体が弾まない。いつもなら「ボフン」とい音がするのに、今回は何故か「ドスン」。もしかしてベッド壊れた? ……とか、体の下になんか違和感を感じるんですけど……。

「あれ…………?」

え、何かいる?

目を開けて、恐る恐る顔を上げる。次の瞬間、思考回路が完全にフリーズした。

見たこともない青年の顔が視界に飛び込んできた。

その深い青色の瞳とかち合った瞬間

。

お互いほぼ同時に盛大な叫び声を上げた。そしてお互い同時にものすごい速さで体を起こして後ずさる。つて、うわあッ、この人上半身ハダカ？！ ちょっととちょっとどビコの露出狂！？ いくらデリカシーのないお兄ちゃんたちでも、そんなはしたない格好はしないのに！！

大体、そもそも！

「だ、誰ッ！？」

青年は苛立たしげにこつちをじろりと睨むと、

「誰だと……？」それはこっちの台詞だ！

「...え?」

そう怒鳴られ、思わず部屋の中を見回す。

まず第一に、なんだか部屋がやたらと広い。壁が何十歩も先にあって、天井も首を少し上げるほどに高い。もしかしたら家のリビングよりも広いかも。といつも、確実に広いでしょコレ。

第二に、なにやらアンティークのようなテーブルやらクローゼットやら、無駄に高そうな装飾品がある。いかにも中世ヨーロッパ風な感じのデザインで、豪華に見えるのは氣のせいでしょうか？そして最後に。

私と青年がいるベッド。

……かなり巨大なんですけど……。

「…………え…………あ、れ…………？」

私の部屋じゃない…………？『びひこひ』と？

ベッドの上で呆然としていると、キラリと、首元で何かが銀色に光る。良く見てみるとそれは 刃の切つ先。

いつのまにか青年はその手に剣を持っていて、それを私の首元に突きつけていた。そして、殺氣を含んだ低い声で。

「もう一度訊く。何故俺の部屋にいる？ 何が目的だ、この変質者め

……何この展開。

さつその叫び声を聞きつけたのか、扉の向こうから慌ただしい足音や怒号が聞こえてくる。そして扉を勢いよく開けて鎧軍団がが中へ入ってきた。こちらを見て、腰にあつた剣を一斉に抜く。でもあいにく、今はそんなことを気にしている場合じやない。

田の前の青年もとい露出狂に剣を突き付けられているため、両手を上げながら先程言われた「変質者」という言葉に反論する。

「こきなり変質者つてなんて失礼な！　言つとくけど、さつさまでちゃんと自分の部屋にいて、ちゃんと自分のベッドに飛び込んだはずなのに、なんでか知らないけどこの部屋のこのベッドの貴方の体の上にいただけで！　私は何もしてないし何も知らない！　ってか、変質者はむしろそっちの方でしうがこの露出狂！！」

「はあ？　何言つてるんだお前。俺は寝巻きに着替えるのが面倒でそのまま上着を脱いだだけであつて、露出狂なんかじやない……つて、話ズレたじやねえか！　とにかくお前はどうのどうだ！？　変質者じやないのなら暗殺者か！？」

「何で暗殺者！？　こわッ！　私はそいらにいる普通の一般人で、名前は奥富千秋！！」

「おくみ……？　随分と変な名前だな」

「むか。千秋が名前で奥富が名字なの！　そういう露出狂な貴方は一体どこのじちら様！？」

「こんな巨大なベッドで寝てて、平然と剣を持っているなんて、どう考へても普通じやない……ってアレちょっと待て、なんかおかし

いぞ。剣？

改めて青年の顔をまじまじと見つめる。

外国人にしか見られない綺麗な金髪に、海が映っているかのよくな深い青色の瞳。睫毛が長く、線の細い顔立ちは嘘かと思ってしまうくらいとても整っている。つまりはこの人、相当の美形。美術館に飾られている絵画から抜け出してきたんじゃないかと思わせるほどの超美形。

……金髪碧眼で、叫び声を聞いただけで鎧軍団が部屋の中へ入ってきて、そして巨大なベッドで寝ていて剣を持つていてこの美形つて……まさか……。

青年はわずかに眉を顰めながらも、堂々と名乗った。

「俺はこのウイアリア国第一王子、セオドール・ウイアリアだ」

お……王子様……ツ？！

あまりにも衝撃的な単語に、あんぐりと口を開ける。え、王子様？ 英語でいうプリンス？ てか、地球上にウイアリアなんていう国あつたっけ？

いやいやいや、待て待て。落ち着け、落ち着くんだ私。まずは状況を把握しないと。

さっきまでは確かに自分の部屋にいた。そして自分のベッドへダ
イブした。「うん、ここまでは確実。なのに、気がついたらこの
部屋について、この自称「王子様」の巨大なベッドにて、そのご本人
の体の上について……。ベッドがあるとこうことは、この部屋はお
そらく王子様の寝室……。

「自分の部屋にいたのに、気がついたりセイは王子様の寝室」だ
なんて、考えられることはただ一つ

「…………異世界トリップ…………」

思考をフル回転させてたどり着いたその答えに、頭の中が真っ白
になる。試しに自分の頬をつねつてみるが、ただただ痛いだけ。
つまりこれは夢なんかじゃない、紛れもない現実。いやいや、ち
ょっと待て。異世界トリップ? なんでそんな非常識なことになっ
てんの……?

まあいいや、とりあえずそれは置いといて(え、いいのか私?)

「もしもし王子様。ちょっとといいでですか?」

「……何だ?」

「変質者が私のほうだつて」とはもう十分わかりました。わかり
ましたので、いい加減この物騒なモノどけてくれません?」
「断る」

「……ッ 即答かい、この露出狂！…」

人がせつからくお願ひしてゐるつていうのに！ 貴方は人の頼みすら聞けないんかい！？ とんでもない王子様ですねちょっと！

剣を突き付けられたままその王子様と睨み合つてゐると、扉の方からどよめきが起こつた。そういうえば鎧軍団がいることすっかり忘れてた。……やば、混乱していたとはいえ、仮にも王子様にタメ口で話した上に「露出狂」だなんて言つてしまつた……！ しかも向こう側からしたら私はどこの馬の骨とも知れない変質者！ え、なに、もしかして死刑！？ 縛り首にされる！？

冷や汗をだらだら流しながら扉の方を見ると、ちょうど鎧軍団が何故か道を開けているところだった。何事かと思っていると、二人の人物が部屋の中へ入ってきた。一人は色素の薄い髪の少女。もう一人は赤い髪の男性。王子様はその二人を見ると、やつとのことで剣を納めてくれた。た、助かった……。

男性は王子様の方へ駆け寄ると、慌てた様子で何やら話しかけ始めた。安全を確かめるような質問をしているあたり、どうやらこの人は従者か何かのようだ。

一方、少女はこちらへ来ると、ふんわりと優しく微笑んだ。

「こんばんわ。わたしはリアナという者です」

「へ？ あ、はい、こんばんわ……」

「そう身構えなくてもいいですよ。安心してください、危害を加えるつもりはありませんから」

「うわ、やつとまともな人がいた！　あああの、私が言つても信じないかもしぬないけど、決して暗殺者じゃないから！　なんか知らないけど突然異世界トリップしたみたいで、気がついたらここにいて！　だからお願ひ、処刑だけは勘弁！！」

へんな所に飛ばされて、何もわからないまま殺されるとか嫌だ！
少女は小さく笑うと、

「大丈夫、いきなり処刑などにはしませんよ。……そうですね、このお話は明日にしましょう。今は夜ですし、貴方も落ち着きたいでしょから」

そう言って、王子様の隣りにいる赤髪の男性に視線を向けた。すると男性はこちらを見て、指をぱちんと鳴らした。

次の瞬間。

激しい眠気に襲われ、意識が一瞬で遠ざかった。

* * *

“眠り”の魔術をかけられた娘は、ベッドの上に倒れ込んだ。そ

の口から小さな寝息が零れる。

「……どうこうことだ、リアナ」「どうもこうもありませんわ。今は夜ですし、あまり大事にしたくなかつただけです。この方が王子の寝室に突然現れたということが広まつたら、大騒ぎになるに決まつてますもの」

大騒ぎ。確かにそつだ。

第一王子である自分の寝室に突然現れるなど、どう考へても普通ではない。暗殺者か、もしくは権力狙いの輩だと考へるのが妥当だ。だがこの娘はどうだ。

突然現れたにも関わらず、自分は暗殺者などではないと主張する。殺すつもりならさっさと殺せばいいものを、何故そのような言い訳をした？ 意味がわからぬ。

「このお方についてはわたしてお任せください。貴方はいつも通りでよろしいですよ」

「……お前がやつらのなら任せせる。正直言つて、早く寝たい」

ふう、とため息をついてから兵士たちを下がらせる 慌ただしい足音が去ると、部屋の中は再び静かになつた。

ベッドの上で寝ている娘に視線を移す。

闇に包まれたかのような漆黒の髪。見たこともない衣服。どこま

でも無防備な寝顔。……というか、人の体の上に倒れ込んで眠りの邪魔をしたということ、魔術をかけられたとはいえ、呑気に寝てるとせざりこつことだ。なんだか憎たらしくなつてくれる。

「……それにしても、ふふ、あの第一王子である貴方が誰かと言ひ争つといひなんて初めて見ました。中々おもしろいものですね」

「は？…………おいロアード、お前何笑つてるんだ」

「いいえ何も？ 気のせいでしょう、殿下」

「…………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686u/>

隣りの王子様

2011年7月26日12時48分発行